四国遍路道の景観と巡礼路

稲 田 道 彦（香川大学名誉教授）

The route and landscape of the Shikoku pilgrimage

Michihiko INADA
Professor Emeritus, Kagawa University

Before the present-day route connecting the eighty-eight temples around Shikoku was formed, there were various other pilgrimage routes in Shikoku. Among these some believe was a pilgrimage route to visit sacred places to practice ascetic training, but almost no evidence remains to prove this. First of all, by examining pilgrimage books we can discover that pilgrims visited temples, huts, places of prayer and other unnumbered sacred sites not related to the eighty-eight places of the Shikoku pilgrimage. Compared with today, pilgrims in Shikoku during the Edo period freely changed their travel route and places of worship. As well, I examine places of worship not part of the Shikoku pilgrimage as written in Shinnen`s “Shikoku Henro Michishirube.”

As Shinnen traveled around and around Shikoku he carefully observed the diverse natural landscape and described the unusual natural phenomenon. By connecting what he saw with the miracles of Kōbō Daishi, it is mostly that he thought about the significance of the pilgrimage. Finally, I describe the natural landscape which I observed while making the Shikoku pilgrimage and the landscape that pilgrims see along the way that stirs up their feelings. For example, at Temple 12, Shosanji there is still a cave in which a dragon was confined and there are fossil seashells along the terrace that are related to the story off Kōbō Daishi turning seashells into inedible ones. I think that part of the allure of the Shikoku pilgrimage to many people today is the landscape which pilgrims encounter along the journey.

1　はじめに

江戸時代中頃に88の寺院を巡る四国遍路の巡礼形式が整備された。その姿は貞享４年（1876）に真念が上梓した『四国邊路道指南』の記述によって知ることができる。なぜ88の寺院が選択されたのかという理由や、どの経路を通るのかという、遍路道がどのような経緯で選ばれたのかはいまだに詳らかではない。『四国遍路道指南』には通過する村々の名前が記載されている。札所も遍路道も眞念の時代には創られていて、それが今に続いている。それ以前の前史ともいうべき時代のことは明らかではない。「辺地（へじ）」という名であらわされる四国の巡礼が平安時代に出現したと考えられている。その後の鎌倉・室町・江戸へと続く時代に四国遍路がどのような形態であったのかは憶測の域におかれている。この発表では現在私が手にすることのできる事例をもとにいくつかの仮説を提示するものである。

2　納経帳による四国遍路の巡礼地の検討

四国遍路の巡礼路としての遍路道を考えるきっかけに、二組の遍路の巡礼の様子を納経帳の記録から考えようと思う。

⑴　吉岡無量居士と妻のぶの納経帳

まず取り上げるのは丹後の国竹ノ郡木橋村の吉岡夫妻の残した二冊の納経帳である。表紙に書かれた住所竹ノ郡木橋村は、現在の京都府竹野郡弥栄町木橋である。安政４年（1857）の旧暦10月（西暦11月）吉日に故郷を後にしている。納経帳には参詣した順に納経印をもらい、この順で遍路を行ったと考えている。現在の納経帳には参詣した日付を書き込むことは皆無であるが、当時はかなりの数の寺院で納経の日付が書き込まれている。**資料１**に彼らの遺した納経帳の各ページに書かれた内容を示す。札所番号と版木による納経印を版

という文字で示した。

資料１　吉岡氏無量居士・妻のぶの四国遍路の納経帳の記載

安政４年　丹後　竹ノ郡木橋村　奉偏禮四国霊場納経　丁巳十月吉日

吉岡氏無量居士・同妻のぶ（表紙、夫婦分二冊）

第78番版　奉納経　本尊阿弥陀如来　東讃陽佛光山道場寺　行者丈　月日
第79番版　奉納経　本尊十一面観世音　崇徳天皇御鎮座所　金花山摩尼珠院　行者丈　月日
第80番版　讃岐　国分寺大悲殿　惣目代　　丁巳10月21日
第81番版　奉納経　本堂千手院宝前　崇徳天皇御廟所　讃州白峰寺　政所
第82番版　本尊千手大悲殿　讃岐根来寺
番外　　奉納経　弘法大師四千二日出御必乙　本尊厄除薬師如来　さぬき国神光山　大蔵院　巳10月21日
第83番版　奉納大乗妙典　本尊正観世音宝前　讃岐神毫山一宮寺
番外　　奉納経　讃州仏生山法然寺　殿司　賜紫一本山　巳10月22日
第84番版　奉納経　本尊千手観音宝前　讃州屋島寺
第85番　　奉納経　本尊正観音　五剣山八栗寺　巳10月22日
第86番版　四国第八十六霊刹　本尊十一面観世音　讃州補陀落山志度寺
第87番版　奉納経　本尊聖観音大悲殿　讃陽補陀落山長尾寺
第88番　　奉納経　本尊薬師如来　東讃大窪寺　巳年10月24日
番外版　　讃州大内郡　白鳥大神官　白鳥郷霍内　祢宜
第３番版　奉納経　本尊釈迦牟尼佛　阿州亀光山金泉寺
第１番　　奉納経　本尊釈迦如来　ア州霊山寺　10月26日
第２番版　奉納経　本尊阿弥陀如来　阿州日照山　極楽寺
第４番版　奉納経　本尊大日如来　阿州黒巖山　大日寺
第５番版　奉納経　本尊地蔵大菩薩　阿州無盡山　地蔵寺
第６番版　奉納経　本尊薬師如来　阿州温泉山　安楽密寺
第７番版　奉納経　本尊阿弥陀如来　阿州光明山　十楽寺
第８番版　四国第八番霊場　本尊千手観音　普明山　熊谷寺
第９番　　奉納経　本尊釈迦如来　正覚山　法輪寺
第10番　　奉納経　本堂大悲殿　得度山　切幡寺
第11番　　巳10月27日　奉納経　本尊薬師如来　金剛山　藤井寺
第12番版　勅願所　金堂虚空蔵大士　阿州焼山寺
番外版　　弘法大師休石納経　本尊十一面観世音　阿波臼嶽観音院
第13番　　奉納　一宮大明神　神主笠原丹後守　別当大日寺
第14番版　四国第十四番霊刹　本尊弥勒大菩薩　阿波盛壽山常楽寺
第15番版　四国霊場十五番　本尊薬師如来　阿州名東郡矢野邑　法養山金色院国分禅寺
第16番　　奉納経　本尊千手観音　アハ観音寺　10月晦日
第17番版　奉納経　本尊七佛醫王善逝　阿波瑠璃山　妙昭密寺　月日
第18番版　奉納経　本尊薬師如来　弘法大師御母剃髪所　母養山　恩山寺
第19番　　奉納経　本尊地蔵大士　阿波国　立江寺　巳11月朔日
第20番　　奉納経　本尊地蔵大士　阿波国　鶴林寺　11月朔日
第21番　　奉納経　本尊虚空蔵大士　阿波國　太龍寺　巳11月朔日
第22番　　奉納　本尊薬師如来　白水山　平等寺　11月２日
第23番　　奉納　本尊厄除薬師如来　阿波国醫王山　薬王寺　巳11月２日
番外　　奉納　土州　十七ヶ所　遥拝處
番外　　奉納　箸蔵寺　伽藍　阿州　安政４年巳11月８日
第66番　　奉納　本尊薬師如来　阿ハ　雲遍寺

番外　奉納　本尊弘法大師　御自作御尊像二　金光山仙龍寺　巳霜月10日
第65番　奉納経　本尊十一面観音　伊予三角寺
第64番版　四国霊場六十四番　石鉄山大悲蔵王権現　別當前神寺
第63番版　六十三番霊刹　高祖御作　本尊毘沙門天　予州密教山　吉祥寺
第62番版　六十二番霊刹　伊豫國一宮大明神　別當　寶壽山
第61番版　四国六十一番霊刹　本尊大日如来　伊豫栴檀山香園寺
第60番　奉納経　本尊蔵王大権現　横峰寺
第44番　奉納　本尊十一面大士　大宝寺
第45番　奉納　大聖不動明王　海岸山　岩谷寺　11月14日
第46番　奉納　醫王尊　浄瑠璃寺　11月16日
第47番版　奉納大乗妙典　四国霊場四拾七番　本尊阿弥陀如来　南海予州熊野山八坂寺
第42番　奉納　本尊大日如来　文殊院　11月16日
第41番　奉納　四十一番　稲荷大明神　円福寺遥拝　11月16日
第40番版　奉納経　本尊薬師如来遥拝　真蔵院　光明寺
第43番版　奉納経　本尊千手観音　遥拝　伊予八幡山　神宮寺
第48番版　奉納経　十一面観世音　清瀧山　西林寺
第49番　奉納　金堂釈迦如来（本尊大覚日尊;無量居士）与州西林山浄土寺　11月16日
第50番　奉納　醫王善逝　いよ　繁多寺　霜月16日
第51番　奉納経　本尊薬師如来　熊野山　石手寺　巳11月16日
第52番　奉納　十一面観音　太山寺
第53番　奉納　本尊無量寿佛（観察智;無量居士）豫州須賀山　圓明寺
番外　奉納　本尊厄除弘法大師　伊与遍照院
第54番　奉納大乗妙典一部本尊大聖不動明王伊豫松山領野間郡県村近見上圓明寺安政４丁巳歳11年11月18日
第55番版　奉納経　日本総鎮守　大山積廣前　別当大積山　南光坊
第56番　奉納経　本尊地蔵大士　泰山寺
第57番　伊豫一国一社　本社石清水八幡宮　別當　栄福寺　巳11月19日
第58番版　天智天皇御願所　千手千眼観世音　龍女一刀三禮彳作礼山
第59番版　奉納大乗妙典　聖武皇帝勅願所　金堂醫王善逝　弘法大師霊場　豫州　国分寺
第67番版　奉納経　本尊薬師如来　西讃州小松尾山　大興寺
第68番版　奉納経　琴弾八幡宮廣前　西讃州七宝山　別当神恵院
第69番版　奉納経　金堂本尊　聖観音　西讃州七宝山　観音寺
第70番版　本尊　馬頭明王　脇士弥陀薬師　三尊供弘法大師一刀三禮御作　西讃州七宝山　本山寺
第71番版　讃州剣御山　千手院道場　弥谷密寺
第72番版　奉納経　本尊大日如来　讃州　曼陀羅寺
第73番版　奉納経　本尊釈迦如来　西讃我拝師山　出釈迦寺
第74番版　奉納経　本尊薬師如来　讃州　甲山寺　月日
第75番版　勅願所　讃州屏風浦善通寺伽藍　大師誕生所　誕生院堂司
番外版　勅願所　日本一社金毘羅大権現　讃州象頭山　納経所
第76番版　奉納経　金堂本尊薬師如来　智證大師誕生之地　訶利帝母日本最初出現所　築地筋塀勅許之場　讃岐国鶏足山金蔵寺
第77番　奉納　本尊薬師如来　桑多山道隆寺

この納経帳から彼らの四国遍路としての巡礼の特徴を考えると、江戸時代において、夫婦が二冊の納経帳を残した事例は少ない。しかし実際に二人で共に四国の巡礼をしたのではなく、吉岡無量居士がすでに死んだ妻のぶ名義の納経帳をもって巡礼した（稲田道彦2011）。死者供養のために巡礼するという思惑の存在がうかがえる。次に興味深い点は、土佐藩と、宇和島藩に入国していない。これは当時、両藩が施行していた遍

路入国禁止政策によるものである（稲田道彦2001. 2011）。これも遍路道が時代の中で変更され、それを受け入れていた遍路の存在を知ることができる。もし札所が聖地を廻る巡礼であれば、かけがえのない聖地は変更ができるはずがない。四国遍路の巡礼として融通無碍の在り方という性格もうかがえる。政策的に禁じられた札所の代替措置として新たな形が出現する。この納経帳には、「土州十七ヶ所納経」のページと、宇和島藩の４カ寺を松山平野で納経印を与える寺院が出現している。遥拝して納経するという形式もこの納経帳からうかがえる特徴である。さらにこの納経帳には番外寺院の納経が記されている。番外札所も同じように札所として扱われている。大多数の番外札所は現在もその所在を追えるが、現在では不明となっている無名寺院が含まれる。札所も巡礼路も時代の中で変更されるという四国遍路の特徴を示している。

⑵　浄慶の納経帳

大分県大分市と臼杵市の境にある九六位山円通寺の、塔頭の三光院の法印であった浄慶が残した納経帳の資料より、四国遍路の巡礼路を考える。浄慶の納経帳は日本廻国六十六部の納経帳の形式に従っている。六十六部は日本国内の六十六カ国の社寺のうちその国では一つの社寺を参詣する巡礼者で、参詣する社寺や、巡礼の経路は固定されていなくて、巡礼者の意思が大きく働く。

浄慶の納経帳はいくつかの部分に分かれていたものを後で一冊に編集したものである。納経の日付や旅程等から13の期間に分けて巡礼をしたと推定している。六十六部としての巡礼の形式を取りながらも、四国では遍路の札所を廻る巡礼を行っている。浄慶の巡礼の全体像は別の論考でみてもらうとして（稲田道彦2013）、四国遍路とかかわる部分を次に示す。13回の一続きの旅行をおよそ20年間余の間に行っている。そのうち四国遍路は１回目と２回目と５回目である。そのほかは西国三十三観音巡礼の寺院と日本廻国六十六部の社寺を参詣するものである。

旅行①　四国遍路。丑年という年号より、天保12年に浄慶は最初に四国遍路を行ったと想定している。丑年は天保12年（1841）、嘉永６年（1853）、元治２年・慶応元年（1863）の可能性がある。納経帳のうちに、嘉永６年は関東地方の寺社の納経印が多数あることより、四国を巡礼することは不可能である。また元治２年・慶応元年は土佐藩が四国遍路の入国を禁止した期間（安政元年11月14日から明治５年頃まで）に当たる（稲田道彦2011）。この納経帳では土佐藩、宇和島藩の寺院の納経印があることより元治２年も該当しないと判断した。よって天保12年を推定した。愛媛県の大宝寺から始めて、笹山でこの旅を終了している（**図１**）。約10ヶ月の期間を要している。

旅行②　阿波国（天保14年２月～３月）（1843.3.8～1843.4.22）、の山岳修験寺院に詣でている（**図２**）。

旅行⑤　四国遍路（弘化２年１月～９月を推定）（1845.4.9～1845.10.3推定）。年号が巳年しか書かれていないので、弘化２年を推定している。１番霊山寺から65番奥の院の仙龍寺までの四国遍路札所を回る（**図３**）。納経の欠けている札所は足摺方面と、石鎚山近辺の寺院37,38,51,52番と讃岐の一国の全部の巡礼をしていない。納経の朱印が２個、３個、４個の札所がある。また年号を２つ記している納経が15番国分寺と、20番鶴林寺のところにみられる。巡礼の順番や日程にとらわれずに、自分の意思に従い気ままに旅をしている姿を想像する。

このうち四国遍路を行った、旅行①と⑤を**図１・２**に②の経路を下の**資料２**に示す。

資料２　浄慶の２回目の四国遍路巡礼

番号等	所在地	本尊名	日付	寺院名	西暦年月日
奉神拝	阿波國　神主	王餘魚瀧　轟大明神　大廣前	卯　二月八日	藤原為儀　佐藤越前正	1843.3.8 推定
四国廿一番奥院奉納		本尊十一面観世音菩薩龍王山		黒瀧寺	
奉納經	阿国	式内神社稲食尊　十二社大権現		別當　栄照山　不動院	
奉神拝	阿波国　阿津江村	十二社大権現　三十八社大明神	卯三月五日	神主　村上相模正	1843.4.22 推定

図１　１回目の浄慶の四国遍路

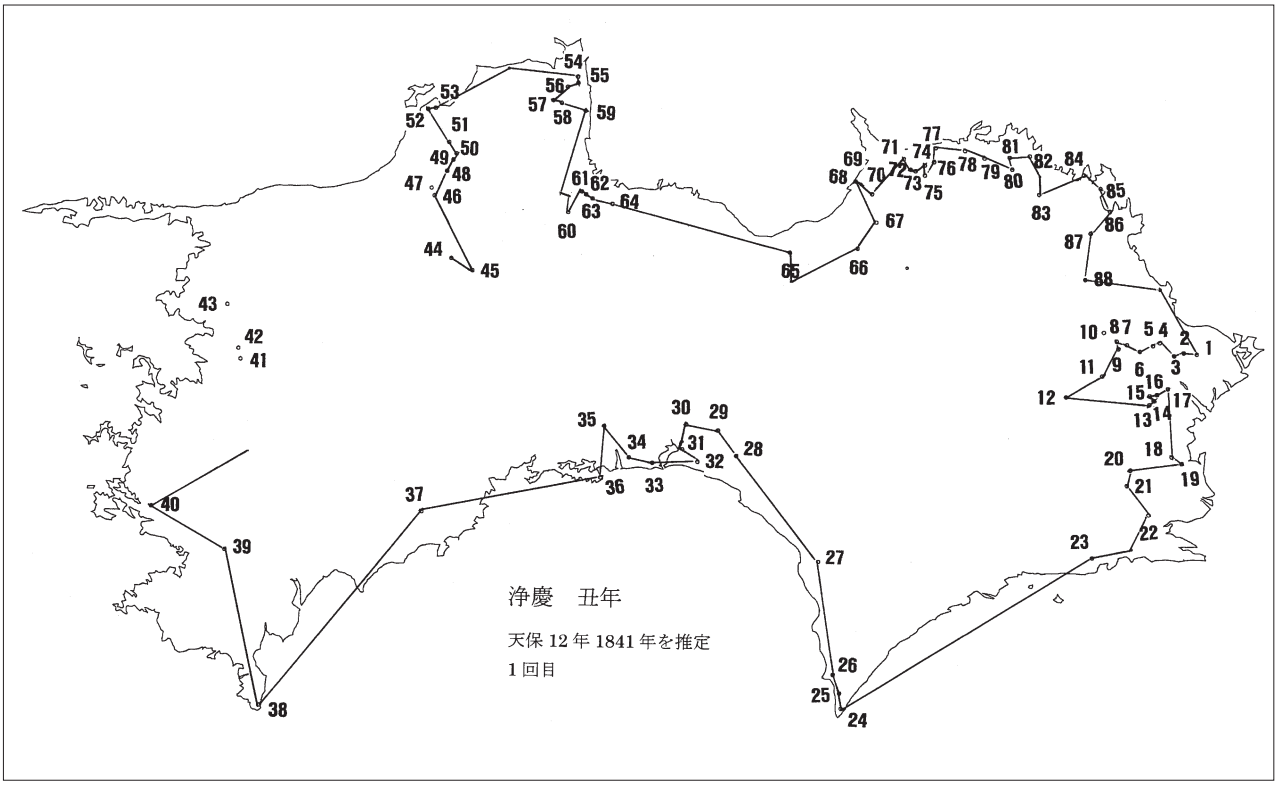
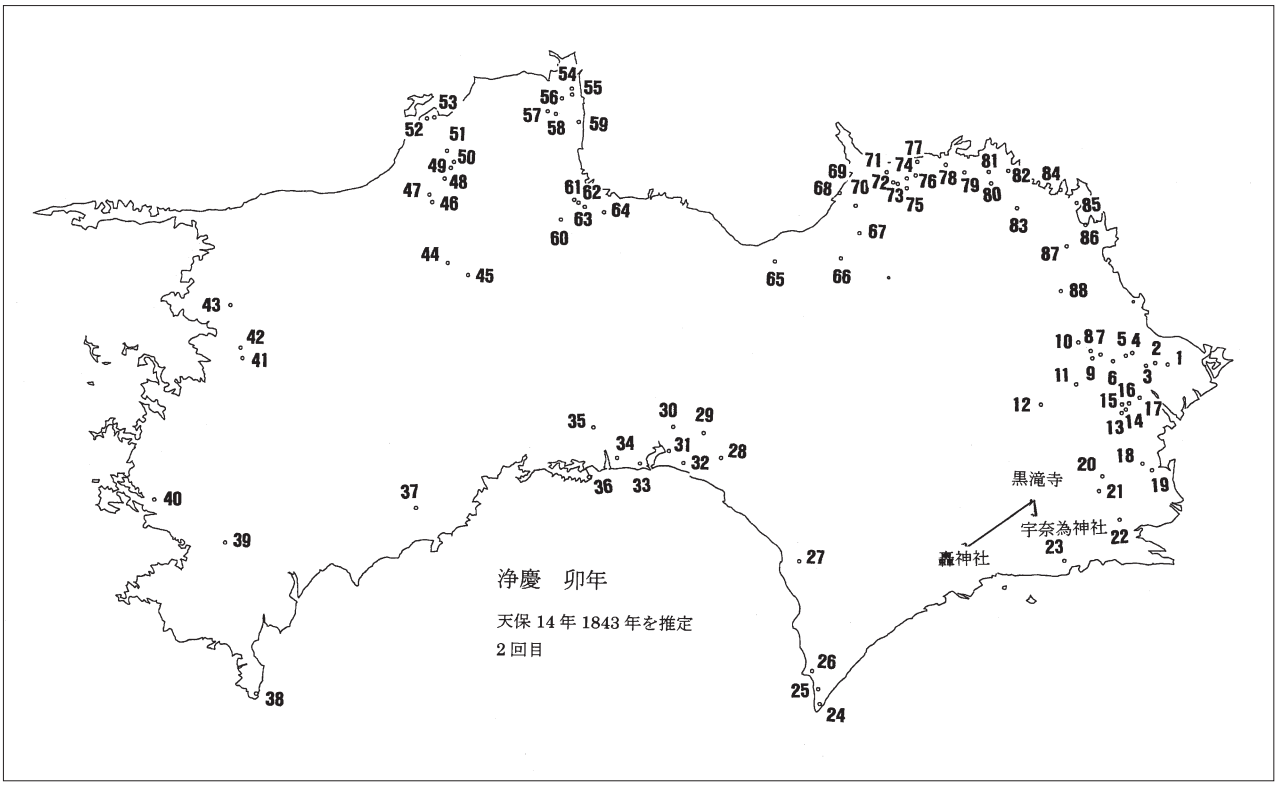
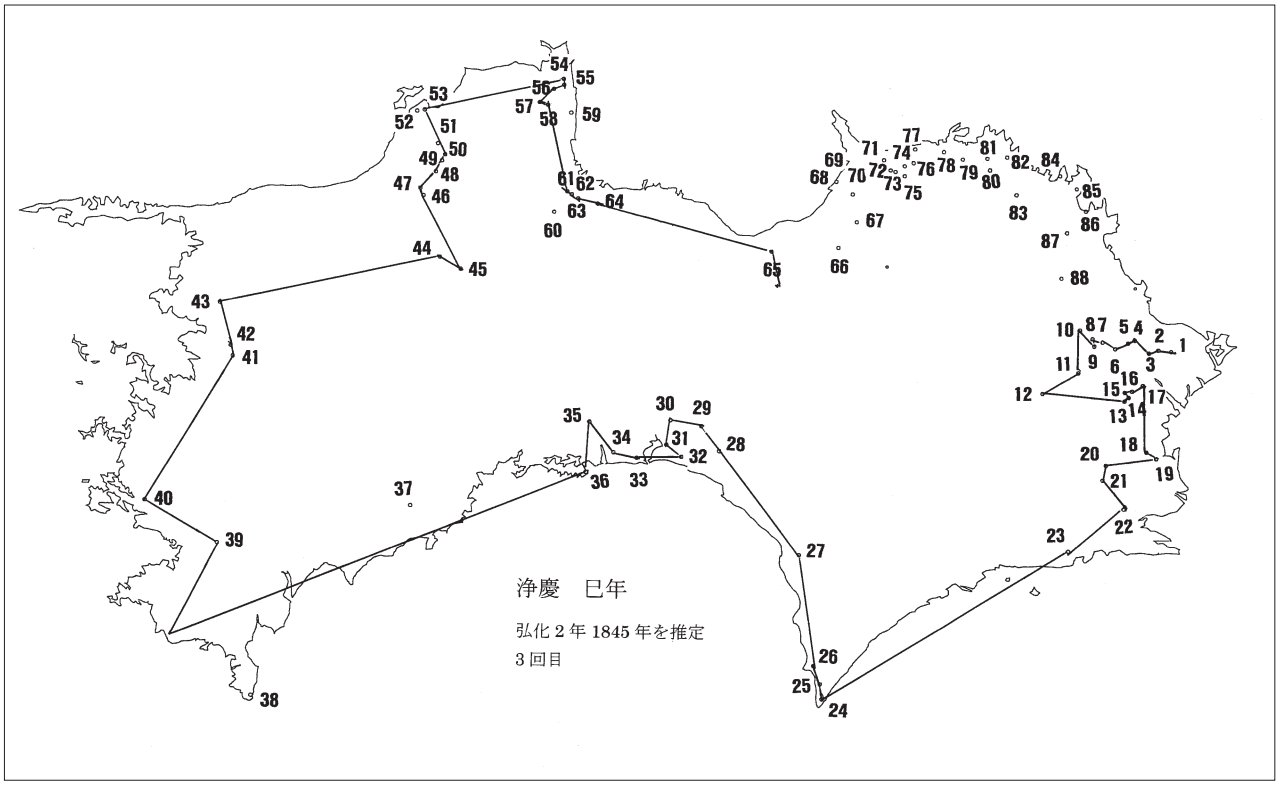


図２　２回目の浄慶の四国遍路



九六位山円通寺は修験道の寺院で、江戸時代、檀家は佐伯藩の藩主だけであった。明治の藩政改革以降は地元に檀家を持たないため、経済的に逼迫したと思われる。これを救ったのが、春秋に開催される四国遍路のお砂踏みであった。浄慶の四国遍路より持ち帰ったと推測するお砂を88ヶ所の家に配置した。近隣の人が数日かけて新四国八十八ヶ所の巡礼を行った。円通寺に地元の人を集める働きをしたと思われる。日本廻国

図３　３回目の浄慶の四国遍路



六十六部であると意識している行者が四国に来た時に、四国遍路の多数の巡礼地を訪れる事例は他の納経帳でも見ることができる。

修験の行者として経典の解説を何冊も残している浄慶は、四国で札所寺院以外の修行の寺院を訪れている。２回目の四国の巡礼を**図２**に示した。本瀧神社は王余魚明神（かれいみょうじん）で、現在の轟神社である。徳島県海部郡海陽町平井字王余魚谷にある。黒滝寺は徳島県那賀郡那賀町に所在する寺院であり、四国八十八ヶ所第二十一番太龍寺奥の院といわれる。次の、栄照山不動院は現在の、那賀郡那賀町鬼頭字内の瀬にある宇奈為神社に相当すると考えられる（長谷川賢二2009）。そして、４番目に納経を受けた、阿津江村にある十二社大権現も同じく現在の宇奈為神社に相当すると考えられる。この４寺社に約１カ月滞在している。岩山や険しい谷間にある景観が修行地となる一つの要素であったと想像する。浄慶の納経帳では順番に全部の寺院を参詣しないで、自由に参拝場所を選ぶ意志がある。

以上二つの事例は、極端な状況で四国遍路をした人の納経帳にあたるが、定まった88の札所寺院以外の寺社を参詣し、納経を受けている。また遍路道と言われる道も、真念が提案した遍路道以外の道を通ったことが推測できる。状況によっては、遍路道が案外自由に選択されていたのかもしれないという推測をさそう。

２　納経帳は遍路の行程を知るデータとなる。

納経帳のデータを集めると遍路の巡礼の経路と日程が分かり、彼らの行程を再現できると考えている（稲田道彦　2017）。この資料集より88の札所寺院以外で受けた納経社寺を**資料３**に示した。

資料３　88の札所以外の参詣社寺、 データとする納経帳と参詣社寺等の名前

この資料集より、88の札所寺院以外で、どういう番外札所で納経を受けているか下に記す。

取り上げた納経帳は、以下の39冊の納経帳である。時代順にしめすと、①空性法師、宝永７~正徳４年（1710~1714）　②甲斐国百々邑　嘉右衛門、天明６年（1786）　③無名、寛政２年（1791）　④無名、寛政２年（1791）　⑤阿陽城下下佐古　山田亦助　代参与作、寛政４年（1793）　⑥無名、寛政５年（1793）　⑦酉歳女、寛政６年（1794）　⑧讃州高松雨嶋羽屋、寛政10年（1798）　⑨上田藤次、寛政13年（1801）　⑩武州熊ケ谷、享和３年（1802）　⑪信州伊那郡小村重〇、文化２年（1805）　⑫土州安芸郡西島村　与三二郎、文化５年（1808）

⑬無名、文化７年（1810）　⑭阿州勝浦郡　伊蔵、文化14年（1817）　⑮無名、文政２年（1819）　⑯宇作、文政３年（1820）　⑰高匠町こと伜林氏、文政４年（1821）　⑱無名、文政５年（1822）　⑲福島町　山家屋　忠右衛門、文政５年（1822）　⑳無名、文政６年（1823）　㉑吉田屋　帋吉、文政７年（1824）　㉒無名、文政８年（1825）　㉓無名、文政11年（1829）　㉔無名、文政13年（1831）　㉕林姓　代参岩（笠）原、天保11年（1840）　㉖大洲領本川村　行者福太郎、天保14年（1843）　㉗備前国　和気郡、弘化４年（1847）　㉘無名、嘉永３年（1850）　㉙淡路国三原郡金屋村　行治、嘉永７年（1854）　㉚願主　五味氏その、安政２年（1855）　㉛丹後竹ノ郡木橋村吉岡無量居士、安政４年（1857）　㉜無名、安政５年（1858）　㉝皇都烏丸　願主永助、文久元年（1861）　㉞讃岐大内郡馬篠邑住、文久３年（1863）　㉟紀州牟婁郡田辺　歓喜禅師、文久３年（1863）　㊱播州加古郡　新野辺住人　大吉、文久４年（1864）　㊲大坂東天満伝保町　いせ、元治元年（1864）　㊳阿陽名西郡左右内村　願主鉄次郎、慶應４年（1868）　㊴西讃岐三野郡荘内郷箱　森満津女、慶応４年（1868）となる。

次に、札所以外の参詣寺院をあげる。（ ）の数字で参詣した人数を示した。また位置の目印としてあげた札所寺院は番号のみを太字で示した。

大雄山　興源禅寺(1)、阿州八幡町　八幡大神宮(1)、阿州木津上浦金毘羅大権現(1)、**1番札所**、太麻彦神社(1)、**2番～5番札所**、五百大阿羅漢⑳、**6番～10番札所**、吉野川無銭渡　光明庵(6)、月光山明王院(1)、**11番札所**、長戸庵(3)、阿州加持水　柳水庵(6)、阿州一本杉一宿山　浄蓮庵(3)、**12番札所**、焼山寺奥院蔵王権現(1)、焼山寺末　杖杉庵(4)、御休石　臼嶽観音院(2)、一宮奥院　観正寺(2)、**13番～17番札所**、昭明山興通蔵寺(1)、阿州安嶋浦　金毘羅大権現　延命院(1)、**18番札所**、阿州釋迦庵(1)、金泥大曼荼羅　紫雲山(1)、金毘羅大権現　アハ勢見山　観音寺(1)、**19番札所**、取星寺(1)、中ノ庄村拳正寺(1)、八幡村神應寺(1)、星谷寺(1)、安明寺(1)、来迎不動明王　灌頂滝(4)、慈眼寺(5)、**20番・21番札所**、太龍寺奥院黒滝寺(1)、阿波国別当　千福寺(1)、**22番札所**、阿波国月夜村　御水庵⑩、**23番札所**、土州十七ヶ所遥拝處(5)、玉厨子山　泰仙寺(1)、**24番札所**、室戸崎女人堂(3)、**25番・26番札所**、西寺行道崎　女人札所(3)、**27番～29番札所**、長岡郡八幡村　八幡宮(1)、**30番～36番札所**、別府山　横倉寺(1)、左川郡別府都大御嶽山(1)、**37番～38番札所**、守月山　南勝寺(9)、市ノ瀬　七里處(1)、**39番・40番札所**、篠山三所権現　観世音寺⑮、願成寺(3)、和霊大明神(2)、宇和島城下　妙長山法円寺(1)、七度御加持処　務清山　多福院(2)、**41番・42番札所**、イヨ永徳寺（十夜ヶ橋）(1)、**43番札所**、豫洲大洲領本川村　萬福山　千如寺(1)、**44番札所**、金山出石寺(3)、**45番～47番札所**、文殊院徳盛寺(2)、稲荷大明神　円福寺(1)、真蔵院　光明寺(1)、八幡山　神宮寺(1)、伊予宇和嶋四ケ所　本尊大日如来　遙拝処(2)、**48番札所**、右衛門三郎札始所　大師庵(2)、**49番～51番札所**、松山　大林寺(1)、松山　千秋禅寺(1)、湯月八幡宮(1)、道後村　義安禅寺(1)、**52番・53番札所**、藝州厳島社　大聖院(4)、粟井坂大師堂　遍照院(3)、**54番・55番札所**、三島本宮(2)、越智郡長福寺(1)、瀬戸田 ?（難読）(1)、生口島　光明三昧院(1)、岩城村　祥雲寺(1)、**56番～58番札所**、鍋地村　法林寺(1)、**59番札所**、御来迎臼井水(3)、生木地蔵大士　正善寺⑭、仏法山妙雲寺(3)、**60番～63番札所**、安国禅寺(1)、**64番札所**、閼伽水安養寺(1)、豫洲村松　地蔵庵(2)、**65番札所**、金光山　仙龍寺㉘、椿堂　常福寺(1)、阿州　箸蔵寺(8)、**66番～71番札所**、海岸寺(1)、**72番・73番札所**、郡家村神野正八幡宮(1)、延命院(1)、**74番・75番札所**、金毘羅大権現(6)、**76番～79番札所**、讃岐遍照院(2)、**80番～82番札所**、岩田山蓮香寺(3)、神光山　大蔵院(2)、**83番札所**、田村大社(9)、仏生山法然寺⑬、聖天山(1)、東讃春日川　常接待茶堂(2)、八島桜庵(1)、**84番～86番札所**、志度寺奥院　地蔵寺(4)、**87番札所**、護摩所　金剛庵(1)、**88番札所**、白鳥大神宮⑬

遍路が、88の札所寺院だけでなく、多数の札所以外の寺院や神社に参詣して納経していることが分かる。現在でも地域においてよく知られる寺院が含まれる。一方で、すでに廃絶していたり、明治時代の廃仏毀釈政策により神社となった神仏習合寺院が含まれる。また明治以降、変更がなされた修験の寺院もある。遍路が立ち寄った堂や庵も納経印を出した。個々の寺社の意志で納経印を出すことが許された状況を想像する。四国遍路が88の寺院のつながりであることが強く意識されていない時代であったともいえる。遍路もこのような場所で納経することを認めていたのではないか。一部では積極的に札所以外での参拝を行ったのではないかとも考える。

3　眞念の「四国徧禮道指南」での札所寺院以外についての記述

眞念は以下のように「四国徧禮道指南」に書いている（眞念、稲田道彦訳注 2015）。

『大師御邊路の道法は四百八十里といひつたふ。往古は横道のこりなくおがみめぐり給ひ、険阻をしのぎ、谷ふかきくづ屋まで乞食せさせたまひしがゆへなりと云し、今は劣根僅に、八十八ケの札所計巡拝し往還の大道に手を拱御代なれは三百有余里の道のりとなりぬ』眞念は自身の経験から、88の札所成立以前は多くの拝所を回り、乞食行のような修行をしていたことを伝えている。

「四国徧禮道指南」では定形として、88の寺社の道案内のスタイルに徹しながら、それ以外の場所の記述を書き加えている。その多くの場所は眞念が拝所とした場所である。次の**資料 4** に伝承や拝所の記述と思える箇所を抜き出した。

資料 4 「四国徧禮道指南」の札所以外の記述

札所番号	寺　院	内　　容	記述の特徴
3	金泉寺	岡宮大師堂	参拝
11	藤井寺	柳の水、旅人の疲れを悲しみ楊枝を加持して湧水を出させ、楊枝は柳の木になる。垢離取り川にて垢離する。坂中に薬師堂あり	伝承
12	焼山寺	禅定あり。右衛門三郎の塚印の杉,並びに地蔵堂	修行、参拝
13	一宮寺	奥院あり	参拝
18	恩山寺	弦巻坂の下に一黒藪という竹、大師降誕の襁褓（むつき）を収む。天王村に宮あり、	伝承、参拝
19	立江寺	立江村に石橋９つ、橋の上に白鷺がいるときは渡ること悪し。岩脇村取星寺に大師鉤召の星、玲瓏（透き通って）として青黒色、霊宝多し。傍ら弁財天の社。岩脇村、正安寺に御作の観音あり。星谷岩屋寺広さ10畳敷きの三角の巌あり、この中に明白なる鏡石あり。坂本村、大師の祈りにより露霜を見ることなし。坂本村長福寺、古佛あまたあり。灌頂が滝、日に三度明王五色の雲と共に降臨、辰巳の刻に拝ませ給う。鶴林寺奥院の月頂山慈眼寺に不思議の峰、半腹に一条ばかりの卒塔婆あり、大師の成さしめる。岩穴の胎内くぐり。幡、華鬘、天蓋、金剛杵、諸仏、龍がある。奥に20畳敷きほどの空間、四方の岩に曼荼羅があり、大師があり護摩並びに求聞持法をなされた。	伝承、自然観察、参拝、修行
21	太龍寺	奥の院あり	修行、
22	平等寺	月夜村この名、子細あり、地元で尋ねらるべし。逆瀬川この川の蜷貝、尖りなし、大師の加持し給うなり。	伝承、自然観察
23	薬王寺	浅川まで八坂八浜、八浜浜中。逢坂で行基菩薩、鯖を請う、断ると馬が倒れる。鯖を差し上げれば馬が立ち上がる。粟ノ浦坂すぎ天神宮。稲村観音堂。免許村大師堂。高園村（たかそねむら）大師堂。母川で大師が女に水を乞う。彼女の差し出す慈悲水に大師が加持し日照りに枯れぬ川となる。	修行（海岸難所）、伝承、参拝
		甲浦の町中に社。白浜町明神の社。相間、沖の岩に法然上人の弥陀の名号あり、潮干に見ゆると言い伝う。野根浦、入り口に宮、並びに大師堂。入木村、八幡の宮。大穴、奥へ入ること17・８間、高さ１丈或いは３・４丈、太守が五社建立。愛染権現と称す。この岩屋に毒龍ありて、人畜損害する。大師辟徐する。あとに権現を安置する。東に大神宮御社あり。過ぎて霊水、亡者に捧げる。聞持道場、また庵あり、後ろに岩窟如意輪石仏、竜宮より上がり給いしよし。龍燈時に上がりし、霊瑞無辺。女人禁制により女人ここに札を納め海辺を行く。	参拝、伝承
25	津照寺	浮津浦、女人は印石より西に行く、行道崎に大師御作の不動、女人はここで札を納む。田ノ浦、八幡宮、大師堂、寺もある。唐浜、坂麓に養心庵、荷物をここに置き、札しまいよし。	道案内・参拝
26	金剛頂寺	唐浜、食わず貝の故事、大師に貝を差し上げないことにより、食えない石貝に変わった。	伝承、自然観察
29	国分寺	八幡村、山上に八幡宮。定林寺村、地蔵堂、本尊石仏御作。	参拝
30	一宮（善楽寺）	薊野村、国の守の氏神、麓に見竜院。及古寺（吸江寺）禅宗風景、煩悩のくもを払う。	参拝

札所番号	寺　院	内　　容	記述の特徴
36	青竜寺	出見村に花山院の離宮があった時、都の空を懐かしみ、何度も出て、空を見たのでこの地名が付いた。ここで崩じられ、千光密寺に廟がある。風景を読んだ弘法大師の御詠歌がある。「道筋にぬきなし機をたてをきて　をりてはうみうみ　をりてはうみうみ」。鳴無大明神とて国主造営の宮、朱門彩瓦、景もよし。今在家村大師堂。	伝承・歴史、参拝
37	五社（岩本寺）	間崎村薬師堂あり。一ノ瀬村、真念庵という大師堂。月山、本尊三日月なりの石、謂れありて御堂なし。益野浦の琵琶箱石、三崎の竜串の海岸があって言語に尽くせぬけいき、岩々と目を驚かすなり。荒瀬に霊験の地蔵まします。	参拝、伝承、自然観察
40	観自在寺	芳原（ほわら）に阿弥陀堂。真崎村の庄屋は代々閉ざさぬなり、有難き謂れあり。秡川（笹川）ここで水垢離をして笹山に向かう。笹山観世音寺、本尊十一面立像五尺。寺より西に天狗堂、その上に三所権現、ここに札納む。矢筈の池の中に恠異の石、池の周りに笹竹あり、夜ごとに龍馬来りて食む。諸病によしとて諸人持ち去る。馬の病むになおよしと言い伝う。槙川村大師堂。	参拝、伝承、自然観察
		岩淵村満願寺、本尊薬師、行基作秘仏。この寺八十八ケの中にあらずといえども、大師草創の梵宮にて、そのかみは大伽藍なりしが栄え年久しく、尽くるになんなんとす、今いだす所の霊場記、この道しるべの料物を集め、かの寺を修理せんこと眞念念願。野井村観音堂、地蔵堂。祝森村地蔵堂。寄松村毘沙門堂。（宇和島）城下町の入り口に願成又は元結掛（もとゆいぎ）ともいう由緒ある寺なり、本尊大師の御影札を打つなり。この城下に三十三ヶ所の観音あり。下村明神宮。中間（なかいだ）村ここに八幡宮あり。光満村、年に七度なる栗あり。務田（むでん）村大師堂。	参拝・伝承、自然観察
41	龍光寺	成家（なりえ）村、観音堂、大師堂。	参拝
42	佛木寺	明石（あげいし）村、明石という大石、是を白王権現という、この石にはいろいろ子細あり	伝承・参拝
43	明石寺	卯之町調物よし、大師堂。大洲城下、舟渡しで大川渡りて十王堂。若宮村大師堂。十夜ヶ橋　由来あり。大瀬村大師堂（千人宿大師堂）、雲林山寿松庵、川登（かわのぼり）村阿弥陀堂。梅津村薬師堂。下田渡（たど）村地蔵堂。中田渡村八幡宮。上田渡村三嶋大明神宮。臼杵村大師堂。二名（二明にみょう）村葛城明神、橋を渡って大師堂。村前村より臼杵の間、天然の幽景目を驚かす。	参拝、自然観察
44	菅生山（大寶寺）	峠御堂（とうのみどう）峠地蔵堂。畑野川、住吉大明神、薬師堂、閻魔堂。坂、山、道すがら拝み所多し。	参拝
45	岩屋寺	古岩屋、先亡回向する所なり。三坂峠より眺望すれば千歳寿く松山の城堂々とし、願いは三津の浜浩々乎たり、碧浪渺洋　中ににょっと伊予の小富士、駿河の山の如し　興居島山島　数々の出船釣舩遍路の憂さを晴らす。桜休み場、大師堂。榎村地蔵堂。窪野村大師堂。	参拝、自然観察
47	八坂寺	恵原村大師堂。恵原村　右衛門三郎の子八人の塚あり。小村大師堂。	参拝、伝承
49	浄土寺	八幡の宮。	参拝
51	石手寺	少し行くと薬師堂。一遍上人の寺あり。山越村に正月16日桜とて毎年この日に当たり爛漫するなり。寺数多くありゆえに寺町という。谷村、室岡山とて横堂本尊薬師、諸遍路札を打つなり。	参拝、自然観察
53	円明寺	鴻之坂の麓に大師堂	参拝
55	三嶋宮（南光坊）	これは三嶋の宮の前札所なり、三嶋までは海上７里あり。馬越村大師堂。	道案内、参拝
59	国分寺	世田に効験殊勝の薬師がいます。楠村大日堂。中村毘沙門堂。丹原町、西に紫尾山八幡、麓に大師御作の生木の地蔵、霊威あげて計え難し。湯浪村地蔵堂あり。古坊村地蔵堂。	参拝
60	横峰寺	これより石鎚山へ９里、毎年６月１日同３日の日ならでは禅譲する事なし。	道案内
63	吉祥寺	楢木村石仏地蔵堂あり。	参拝

札所番号	寺　院	内　　容	記述の特徴
64	里前神寺（前神寺）	蔵王権現の社、これすなわち石鎚山の前札所なり。本札所は石鎚山前神寺、麓より12里あり。この札所は高山にあり、６月１日から３日しか参詣できず。このため里前神寺に札を納める。角野（すみの）村薬師堂。上野村大師堂。土居村地蔵堂。小林村観音堂。具定（ぐじょう）村大師堂。中野庄村地蔵堂。滝宮村牛頭天皇の社並びに薬師堂。中曾根村　今村孫兵衛の庭中に奇石あり龍寶となづく。禅宗南山叟の詠あり。	道案内、参拝、伝承
65	三角寺	奥院あり。本尊は大師御影。半田村観音堂。領家村観音堂。田尾（たいお）村地蔵堂。佐野村、地蔵堂並びに阿州番所。坂中に御作の泉あり。	道案内。参拝
67	小松尾山（大興寺）	観音寺町、川の麓に十王堂あり。	参拝
68	琴弾八幡宮（神恵院）	是より瞻望すれば蒼海天と一色にして国々島々直下して、右は有明の浜、左は川港と出入り舟多く、観音町数千の軒を並ぶ。	景観
70	本山寺	上寺村いせはやしとて太神宮ます。大見村大師堂。	参拝
72	万荼羅寺（曼荼羅寺）	寺より３町西に水茎の丘とて西行法師の住める庵の跡あり。	歴史
73	出釈迦寺	この寺札打つところ18丁山上にあり　然れども謂れありて堂社なし、故に近年麓に堂並びに寺を立つ。	参拝
77	道隆寺	中津村石仏の地蔵堂あり。塩屋村左の方に天神の宮。	参拝
78	道場寺（郷照寺）	野沢の水霊水、５丁山上に醫王善逝石仏、大師の作。	参拝・伝承
81	白峯寺	この寺に児（ちご）が嶽とて百余丈の嶽あり、備州安那郡曾根原の寶泉密寺の雲識、歳18、高祖のいときなき捨身のお誓いをや学びけん、この嶽より飛び落ちけるに、うつつに黄衣したる僧半腹にまして受け止め給うこと再び、（略）思いもよらぬ後ろの谷より伝い道もなき百余丈の底を飛び出でてきにけり。	伝承
82	根来寺	飯田村　八幡の宮。	参拝
83		仏生山に駆くる時は一之宮より屋島寺まで３里半。大田村八幡。伏石村八幡宮。木太村三十番神宮あり。屋島に上る坂に地蔵堂あり。	参拝
85	八栗寺	奥院へは４丁、山登る。	
		田井村、ここに道休禅門の墓、この禅門長く大師に帰命し奉り、履物せずして巡礼すること12度、すべて27度の遍路功成りて遂にみまかる。皆々回向奉る。志度村町の西に園子尼の寺あり、本尊文殊。	参拝
87	長尾寺	額村ここに護摩山とて大師御修法の所あり、経座ともいう。	参拝

各地の参拝される堂や庵が記入されている。また伝承を簡潔に記している。自然観察として各地で見られる不思議な現象が書き込まれている。

4　四国遍路の景観

眞念の『四国徧禮道指南』の記述に重ねて、発表者の体験を述べる。実際に眞念が述べた場所を訪れると眞念がかいた風景が現在も実在している。

11番焼山寺には火を噴く蛇を閉じ込めたという窟屋がある（**写真１**）。本堂を登った位置にある。岩に穴をあけて蓋をしたように岩が切れ込んでいる。確かにここに邪悪な蛇を閉じ込めたという説明を当時の人が納得したことに合点がいく。さらに想像するとこの窟屋があったことが、焼山寺が霊地として見いだされ、修行の場となり、のちに寺院建立に至ったのではないかと。次いで星谷岩屋寺の三角の巌も

写真１　焼山寺の窟屋

写真２　星谷岩屋寺の三角の磐

写真３　灌頂の滝

「四国徧禮道指南」に書かれたように現存する（**写真２**）。岩の中にあるという明白なる鏡石の存在を確かめることはできなかったが。三丈ばかりの滝と弁財天の社もある。

鶴林寺の奥院とされる慈眼寺に行く途中にある、灌頂の滝は約70メートルの高さから小さな水流が垂直に近く落ちる滝である（**写真３**）。下に届く前に細かな水しぶきになって付近に飛び散る。それに太陽の光が当たると虹ができる。これが本尊の不動明王が降臨した証と考えられた。「四国徧禮道指南」には太陽がこの滝に光を当てる時間の辰巳の刻が参詣によいと記している。慈眼寺には胎内くぐりという鍾乳洞がある。案内人を頼み、洞内に入るが、身を反転しながら狭い穴をくぐるような洞を進むと奥に大きな室があり、弘法大師が求聞持法を修した場所と言われる。鍾乳石や石筍には仏教にちなむ名前が付けられ、ここで行われた宗教行事に共感する。暗闇と狭い穴を潜り抜ける恐怖感から解放された時の安ど感は大きかった。案内者はこの経験はお母さんの胎内での経験で、穴から出るときが誕生で、生まれ変わって、新しい人生がやり直せるといっていた。自然景観の中の修行に宗教的な意図を読み解きながら巡礼が行われる。私を含め多くの人が穴くぐりの大変さから、理性ではなく感情の次元でこの伝承を納得した。

写真６は室戸市尾崎近くの夫婦岩である。太い棒のような岩が垂直に屹立している。二つの岩にはしめ縄が掛けられる。これを見て、稀有な存在である風景に見入ってしまう。造化の神の存在と、それに比較して人の営みの小ささも感じる、ここが例外的に出現した景色の場所であると納得し、記憶に留める。**写真７**は御蔵洞である。弘法大師が悟りを開い

写真４　灌頂の滝にかかる虹

写真５　慈眼寺 胎内くぐりの入り口

た場所と言われる。求聞持法の修行をしている弘法大師に海から明けの明星が大きな光となって口に飛び込んできたという。暗い洞窟の中から、ぽっかり開いた入り口から見える外界の景色は、長時間、神経を緊張させながら経文を唱えて、外を見ている人にはこのような異常な心理的体験があってもおかしくないと思える。**写真８**の食わず貝は、旅をしている弘法大師が貝を拾って帰る漁師に分けてくれるように頼んだところ「食えない貝だ」と答えた。以降このあたりでは食えない貝がたくさん採れ、食わず貝となった。実際に現地に行ってみると、貝の化石が積み重なっている路頭である。荒唐無稽な話と思えていたことが、実際に貝を見ることにより、弘法大師の起こした奇跡の証拠を見ることになる。

月山神社の三日月の石はその形の特異性から信仰を集めたものである（**写真９**）。初めて遍路する人は行くように勧めている。現代人から見ると変わった形の石であるが、この石の生成、そしてここにある意味や、それにまつわる想像や伝承から、不思議な存在であると認められたのであろう。四国遍路が不思議な「もの」や奇跡の証拠を見る旅であったことを示唆する。**写真10**と**写真11**は満願寺に植えられている二重柿である。柿の中に小さい柿が入っている、

写真６　室戸岬近くの夫婦岩

写真７　御蔵洞

写真８　唐浜の食わず貝の貝化石

写真９　月山神社　三日月型の石

写真10　満願寺

写真11　二重柿

写真12　岩屋寺　鎖禅定

写真13　正月十六日桜　龍穏寺（松山）

突然変異の植物で奇跡と重ねてとらえられる。さらに三間村に年に七度なる七度栗があると眞念が記している。現地で聞くと最近までその栗がみられたが、今は枯れてもうないといわれた。そのほかに、クワズイモ、食わず梨など、食えない作物　も各地にある。弘法大師の加持によって生じたとされる不思議な植物を見出し、それを伝承して珍重することは四国各地で残されている。四国遍路には弘法大師の成した奇跡の証拠探しという側面も考えられる。

写真12は岩屋寺の鎖禅定の入り口である。扉は施錠されているが、希望者には鍵を貸してもらえる。屹立する岩峰に鎖とはしごで登り頂上の白山社に参拝する行である。自分の手と足の力だけを頼りに登る。落下する恐怖との戦いである。恐怖を超越して安定した心理に至るとの思いが隠されている。験力を求めて修行をする修験道と似た発想である。恐怖を克服すると克己心につながるという想いであろうか。こういう岩壁をよじ登る修行は85番八栗寺の裏の岩壁にもあるが、現在は危険な場所として入山禁止になっている。太龍寺の南舎心も同じ気持ちで眺めた。さらに岩壁を飛び降りる試練もあったのかもしれない。73番出釈迦寺の奥院から幼少の弘法大師が飛び降りた。81番白峯寺では稚児が嶽から修行する僧が飛び降りた話が伝えられる。それを途中で僧侶に受け止めてもらう。邪心がなく修行をする人は望みが叶えられるという教訓か、こういう超人的な修行をする人がいるという伝承か、考えさせられるが、恐怖心を克服する修行も四国遍路の周辺に配置されていたのではないか。

写真13は松山市龍穏寺の正月16日桜である。元あった木は第二次世界大戦の空襲で焼けてしまい、似た性質の木を新たに植えたものである。地元では孝行の証として花が咲く時期を早めたとの伝承を持つ。眞念が書き留めているから古くからあったと思われる。早く咲く桜の突然変異を人の願いの結果とする当時の人々の考え方が表れている。

さらに眞念の「四国徧禮道指南」には穏やかな幸せを感じる平和の風景が書き込まれている。一つは高知県の横浪の海上から、入り江に点在する八坂八浜を見た風景である。馬が放牧され、のどかである。次は三坂峠から見下ろした松山城下の風景である。城を中心として整然と営まれる人の生活を見下ろしている。さらに琴弾八幡宮から見下ろした観音寺の街並みの風景を挙げている。海からの産物を得て、人々の日々の営みが平安になされていることを山上から鳥瞰している。遍路は巡礼中、自身は社会の営

みから離れて社会を眺めるため、客観的に風景を評価することができたのではないか。理性的にほかの地域の社会や生活や文化を眺めることができることも巡礼の一つの特徴であろう。私が1989年に歩き遍路をしたときは、バブル経済がはじけたころで、突然リストラされたという遍路と多くであった。今までの人生と切り離した次の人生を構想するために遍路をしているという人々であった。四国遍路は現世と来世の間の世界を巡礼するという考えを言われたことがあるが、自分が含まれるのとは違う外の世界の論理を知ることにつながる。違った行動原理や社会の運営原理に触れると、それまで自分がその中で生きるために苦しんできた社会が小さく見え、外に飛び出して生きる勇気を与えてくれる。そして四国に住む人にとって遍路が修行する人で、遍路は善人であるとみなす文化がある。道を教えてくれ、子供たちがあいさつしてくれ、接待と称してものやサービスを提供してくれる。遍路にとって善意に満ちた扱いをしてもらうことも、自身を社会においてかけがえのない存在であると再認識する手立てになる。そして長い時間歩き続けるということは自分自身との対話でもある。自分自身の歴史を確かめ、自分の周りにいた人との関りを見つめ、自分の心の在り方を尋ねるものであった。これも遍路の周囲に善意にあふれる四国の人がいたおかげであると考える。

おわりに

現在の四国遍路は88の寺院に参拝することにフォーカスされている。江戸時代の四国遍路は88の札所以外の寺社や庵や祠にも参詣していた。そこで多種な納経印を受けていたことを納経帳の事例により示そうとした。88の寺院参拝が四国遍路の姿であることを最初期に書き記した「四国徧禮道指南」にも多くの社寺が取り上げられていることを示した。遍路の経路も時代によって障害があればそれを避けるように新たな道が出現した。そして遍路自身も、どの道を通るか、どの寺院に参詣するかも個人の考え方による部分があった。

仏教の教義に従い本尊の宗教的な意味を理解し、仏教の奥義に迫ろうとする四国遍路が厳然と存在することを認めたうえで、それとはベクトルが違う方向を目指す四国遍路が存在するのではないかという視点から、この論を展開した。自然宗教に近いその考え方は仏教による統制が精緻化される前の状況を反映しているのではないかと考えている。それを景観という切り口で示そうとした。自然の景観、人の景観、それらが一体となっている世界としての四国を遍路は回った。そこで彼らが経験するのは弘法大師がなしたという奇跡の証拠を見つめるものであった。地形や植物にその証拠を求めた。恐怖などの非日常の感覚を感じる体験を通じても今まで味わなかった感情を得た。修行を意識した行動である。具体的には洞窟や岩壁の小道を通った。また山道を歩いたり、海岸を巡ることであった。奇跡が起きた証拠の発見は自分が行っている四国遍路がどういう意味があるのかという認識につながった。

四国遍路を支えている四国の人が持っている文化が遍路を今も支えている。お接待に代表される善意の表明である。これによりただ単に旅行するのではなく、「人生を考える旅行」の巡礼が今も遍路にとって可能となっている。

引用文献

稲田道彦（2001）『江戸時代末期と明治初期の二家族の四国遍路の旅』香川大学経済論叢74-1,77-100p
稲田道彦（2011）『幕末期の四国遍路の巡礼路の変更』香川大学経済論叢　84-2、1-21p
稲田道彦（2013）『日本廻国六十六部と四国遍路　―浄慶の納経帳から―』香川大学経済論叢86-2　5-12p
稲田道彦（2017）『四国辺の納経帳資料集』香川大学瀬戸内圏研究センター
眞念、稲田道彦訳注（2015）『四国徧禮道指南』講談社学術文庫2316　講談社　1-331p
長谷川賢二（2009）『四国遍路の周縁における霊場と信仰　―阿波国南部の事例から―』第１回四国地域史研究大会―四国遍路研究前進のために―公開シンポジウム・研究集会報告書